

2005年度 森村・川村ゼミ議事録

11月9日分

記入者:小椋なつき

司会者:武道良子

日本のアヴァンギャルド2

発表グループ:A(石原・山田・藤村)赤瀬川源平

議題

A: 芸術と犯罪との境目とは何なのか(千円札事件について)…芸術はさばくことができるのだろうか。

グループの考察

A: 原平に対する千円札裁判での判決は有罪であった。しかし彼はその後の著書で取り上げているように、法廷空間を利用して裁判そのものを作品とかわしてしまっただけで、作品を押し付けられることで「作品の完全なる保存」を果たし、裁判の経験から超芸術へと開花し進化していく彼の功績は「有罪者」以上に、別の形で評価すべきことである。

原平は千円札事件の法廷においても、裁判官をおちよくるなどの行為をしていた。千円札をコピーするという行為は法律で犯罪とされているが、こういった彼らの芸術行為はさばかれるものなのであろうか。

議論の展開

・ポルノと芸術問題というのも年々変わってきている。表現の自由が問われてきている。
→犯罪と芸術の境目はゆらぐ

・常識で考えれば犯罪ではあると思う→それで私たちの世界は秩序が保たれている

・原平はすべてがあそびだったように思える。→重みを感じられない。しかしあえてそこを狙いではないか。

・原平は芸術とは何かということを深く考えたが、楽しければいいというような結論に達したのではないだろうか。しかしたださわいでいただけではなく、不思議なエネルギーを感じる

・原平は反芸術といいながらも、自称超芸術家と自認している。いまだに彼は芸術とのかかわり方を模索しているようだ。→結局芸術という土台からはずれられない
ここでの反芸術…表現のパターン化や格式化に対する反発

・源平の作品は私たちに「これも芸術になるのか？」と問いかけている。受け手をえらばない。誰でもみられる。

↑

| どれが正しいのか？

↓

・芸術を普通の人々におろすことは他でもやられている。例・美術館のワークショップ等源平のやったことは従来の芸術に対する皮肉にしかとれない。

記入者の考察

やはり私もこの班と同様に、原平からは「芸術が好きだ」という熱が感じられるような気がする。ハイレッドセンターにしろ、日本芸術探検隊にしろ、その表現方法は違うが、形や姿をかえ、芸術とはなんなのかという終わらない旅を続けているような気がしてならない。芸術に対する皮肉にもとれるが、その裏側には結局芸術から逃れられないという強い思いがあるのだと感じた。

芸術と犯罪の境目はあるようでないと私は思う。法律も芸術作品も所詮人の手で作られたものであって、真実なんてあってないようなものだと思うからである。ただアングラ演劇にもあったように、そこでしか犯せないタブーみたいなものにひとはなにか強い憧れをもっているような気がするのだ。「常識」というものから外れたと感じたとき、ひとは味わったことのない新しい思いや感動をもちうるのではないか。

それを芸術を使って体現させてくれるのであるから、原平の作品は今勉強してもとても興味深く、その当時で感じてみたかったと強く思わせる。そのように感じてしまう力が彼にはあると思う。